

檜の会

平成十九年
睦月
第二十一号

NPO法人「檜の会」事務局
京・東山やすい松小路
TEL/FAX 〇七五-五二五-〇八〇三

皆様のご意見、ご投稿など
お待ちしております。
E-mail BD503240@nifty.com

企画・編集／檜の会会報編集室
発行／季刊（一・四・七・十月）
<http://village.infoweb.ne.jp/~hinoki/>

明けましておめでとうございます
おめでとーう
ございませう



会員の皆様には、お健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。
昨年は、天地異変などいろいろな災害も多く、大変な年でございました。今年
は、穏やかな年でありますように願っております。

さて、NPO法人檜の会も三期目を前に、大切な時期を迎えております。しか
し、会員の皆様の暖かいご支援ご協力によって、御蔭様で徐々に充実した会と
なっておりますことは大変喜ばしく、深く感謝申し上げます。

「続ける事が大切」比叡山天台宗の今は亡き山田恵諦座主さまより頂いたこ
の何気ないお言葉には、初心に戻るかどうか、そして無になれるかどうかと
教えていただいたのでございませう。

NPO法人檜の会、今年の目標は会員の皆様方全員にご参加を賜り、益々発展
することを念じています。よろしくご支援のほどお願い申し上げます。

NPO法人 檜の会

理事長 安田 紀美子
役員 一同

百人一首と親子 脇谷 英勝

- 一【(一)天智・(二)持統】・二【(一)遍昭・(二)素性】・三【(一)陽成・(二)元良】・四【(一)康秀・(三)朝康】・五【(一)三条右大臣(定方)・(四)朝忠】・六【(一)忠岑・(四)忠見】・七【(一)清原元輔・(六)清少納言】・八【(一)謙徳公(伊尹)・(五)義孝】・九【(一)公任・(六)定頼】・十【(一)和泉式部・(六)小式部内侍】・十一【(一)紫式部・(五)大式三位】・十二【(一)経信・(七)俊頼】・十三【(一)俊頼・(八)俊恵】・十四【(一)法性寺入道前関白太政大臣(忠通)・(九)慈円】・十五【(一)頭輔・(八)清輔】・十六【(一)俊成・(九)定家】・十七【(一)後鳥羽・(百)順徳】

() 番号は歌番号です。

これは、百人一首における親子関係を示したものである。こうした中で、和歌史・文学史の上から見て、特に注目すべき親子をとりあげると、二・六・七・九・十五・十六・十七が考えられる。(ただし、(七)・(七四)・(八五)の六條源家三代については、紙幅の関係で、ここでは極めて簡略に紹介することにする。

二の遍昭・素性は、古今集を代表する歌人父子であり、遍昭は六歌仙の一人。素性は撰者時代を代表する歌人であり、宇多上皇の宮滝御幸には、菅原道真等と共に供奉している。六の壬生忠岑・忠見は、忠岑は古今集撰者の一人であり、「忠岑十体」の著者でもある。忠見は、天徳四年内裏歌合に、(四〇)の平兼盛の「しのぶれど」の歌と優劣を競い、判者実頼を困惑させるなど、種々のエピソードが伝えられる。七の清原元輔・清少納言は、元輔は「梨壺の五人」の一人として、後撰集撰進や万葉研究にも活躍した。娘の清少納言は、「枕草子」によって文学史に不滅の名を残した。九の公任・定頼は、二代に亘る一流の文化人として著名である。公任は「三船の才人」としてよく知られ、「和漢朗詠集」の編者、「拾遺抄」の選者であり、「和歌九品」・「新撰髓脳」などの署がある。定頼は、能書家・誦経の名手としても

知られるが、小式部の「大江山」の歌のエピソードで有名である。十の和泉・小式部母子は、和泉は和歌史上最もすぐれた女流歌人として、恋多き女人として、「和泉式部日記」の主人公としても知られる。小式部は母と共に上東門院彰子に仕え、数多くの男性から愛されたが、二十代半ばで病没している。十五の頭輔・清輔は、歌学の家六條藤家の人である。頭輔は、詞花集を撰し、屢家に歌合を主催し、清輔は歌人としてのデビューは遅かったものの、六條家歌学を発展させ、「奥義抄」・「袋草紙」など多くの歌樂書を著し、続詞花集を撰したが、二條院崩御のため勅撰集にならなかった。十六の俊成・定家父子はあまりにも有名であるが、俊成は撰載集を撰し、「古来風躰抄」などを著し、歌人としての長い活動とともに歌合判者としても抜群の功績を残した。定家は百人一首の作者(撰者)として一般によく知られるが、新古今集撰者の一人であり、後に新勅撰集も単独で撰している。日記に「明月記」があり、「詠歌大概」・「近代秀歌」・「毎月抄」など著作も多い。十七の後鳥羽・順徳父子は、承久の乱後それぞれ隠岐・佐渡に流されたが、後鳥羽院は正治百首・千五百番歌合などを主催し、新古今集に大きく関与した。「後鳥羽院御口伝」の著がある。順徳院は、父親譲りの歌才の持ち主であり、歌会・歌合を屢催し、歌壇を主導した。「八雲御抄」などを著した。

このように、百人一首には、親子で歌を採られたケースが多く、成立のプロセスや種々の難しい問題をさしおいても、興味深いものが多々ある。最初の二首と最後の二首が天皇親子であることも注意すべきであろう。

定家の撰歌基準の問題や作者選定の問題など興味尽きないものがあるが、私としては、兄弟としては、在原行平・業平があり、異色としては、万葉時代の人物でありながら、古今集に一首だけ採用された、唐土に果てた安倍仲麿がいることも書き添えておこう。

(帝塚山大学文学部教授・当会副理事長 二〇〇七・一・二〇 吉野にて)



「豆知識」

「文室氏の祖と末裔」

天武天皇第四皇子長(那我)親王の第七子大市(「賜」文室真人の姓)を祖とし、波多麻呂―澤雄―宗子―康秀と続き、朝康の二男康永が、應和三癸亥二月(九六三)に近江國愛知郡一色の縣(現東近江市下(一色)に社家を創立。その子康兼が同郡押立山に鎮座の火産靈大神、加賀白山より伊那那美大神の二柱を遷御奉祀、初代神官として奉仕、爾来子孫が押立庄の総社押立神社の社家を連綿と努め、当代の宮司文室久明は四四代、蛤御門前の護王神社宮司文室隆紀氏は、四〇代賢三郎の孫に当たる。



「八色の姓」

天武天皇十三年(六八四)十月に、「諸氏の族姓を改めて、八色の姓を作りて、以て天の萬の姓と混す」即ち「八色の姓」「真人」「朝臣」「宿禰」「忌寸」「道師」「臣」「連」「稻置」の八称の姓が制定され、公姓十三氏に「真人」姓、十一月臣姓五十三氏に「朝臣」姓と定められたが実際には、「真人」は最高爵位で五姓以内の皇室近親氏族に、「朝臣」は真人以外の皇族氏族であった。(文献引用:「文室氏の研究」小川寿一著)

「お知らせ」

●檜の会主催

◇古都奈良探策(天河神社他)

日時 四月中旬頃
案内 脇谷英勝氏(帝塚山大学文学部教授・当会副理事長)
申込 後日案内

●檜の会後援

◇鏡展(作家山本晃久)祖父・故人間国宝山本鳳龍(眞治)師

日時 四月十五日(日)〜二十日(金)
場所 サロン・ド・ひのき(当会事務局一階ギャラリー)